

乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の 教育

11  
2008



最

新

刊

フレーベル館創立100周年記念出版

# 倉橋惣三文庫 <全10巻>

倉橋に学び、保育を極める。

日本保育界の父と呼ばれ、現代保育に影響を及ぼし続ける倉橋惣三の主要著作、倉橋に関する評論・エッセイを集めた全10巻。

倉橋研究の第一人者・森上史朗の名著『子どもに生きた人・倉橋惣三』の改装版

## 倉橋惣三文庫⑦

### 子どもに生きた人・ 倉橋惣三の生涯と仕事(上)



森上史朗／著

- 第1章 生涯
- 第2章 思想
- 第3章 児童福祉

108-07

18×12cm 220頁 定価1,260円(税込)

## 倉橋惣三文庫⑧

### 子どもに生きた人・ 倉橋惣三の生涯と仕事(下)



森上史朗／著

- 第4章 保育
- 第5章 家庭教育
- 第6章 児童文化

108-08

18×12cm 220頁 定価1,260円(税込)

好評発売中



### ① 幼稚園真諦

倉橋惣三／著 柴崎正行／解説

18×12cm 148頁 定価1,155円(税込)

### ② 子供讃歌

倉橋惣三／著 森上史朗／解説

18×12cm 236頁 定価1,260円(税込)

### ③ 育ての心(上)

倉橋惣三／著

18×12cm 180頁 定価1,155円(税込)

### ④ 育ての心(下)

倉橋惣三／著 大豆生田啓友／解説

18×12cm 244頁 定価1,260円(税込)

### ⑤ 幼稚園雑草(上)

倉橋惣三／著 柴崎正行／解説

18×12cm 276頁 定価1,260円(税込)

### ⑥ 幼稚園雑草(下)

倉橋惣三／著 柴崎正行／解説

18×12cm 220頁 定価1,260円(税込)

続刊予定

⑨倉橋惣三・その人と思想

⑩倉橋惣三と現代保育(仮題)

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第 107 卷 第 11 号



乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の教育

第107巻 第11号

もくじ

巻頭言

幼稚園教育要領改訂に寄せて

松村和子

特集 子どもと音

子どもたちから教えてもらった音楽の学び方

加藤富美子

子どもの歌をめぐって

角藤智津子

『リズム』という絵本

真砂秀朗

響き合う音 響き合うからだ

猶原和子

新しく生きる

津守 眞・津守房江



杵岐島便り (3)

田内英理子

おいしい秋

発達心理学者の子育て奮戦記 (5)

長田瑞恵

食事

子どもと保育の情景 (23)

戸田雅美

今できることは二つしかないんだ！

お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (23)

多様な機能をもつ幼少年期教育・保育施設

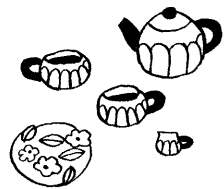
フランクフルト市における陶治ネットワークの活用実態 (1)

大戸美也子

保育の現場から

渡邊満美

支えてくれている人の存在



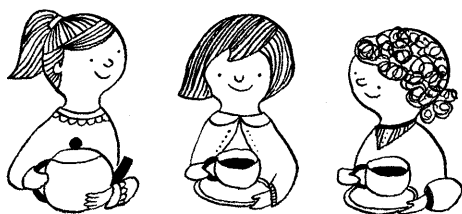
## 幼稚園教育要領改訂に寄せて

松村 和子

この二〇〇八年春、幼稚園教育要領が改訂され、来年度から施行されることになりました。保育所保育指針ほど大きく変わらないとはいえ、現場ではその改訂に合わせて幾つか見直してみることがありそうです。また、昨年には教育基本法、学校教育法が改正されており、合わせて自分たちの実践にどう影響してくるのかを考える必要があるでしょう。

### 幼稚園の教育の重要性

「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであること（教育基本法第二章第十一条）」、また、学校教育法の第一章総則の第一条で、学校の規定が幼稚園から始まっていることを合わせて考えると、幼稚園での教育が、その子



どもの生涯にわたる大きな意味をもっていることが示されています。小学校以上の教育の基礎としても位置付けられています。幼稚園教育は「幼児期にふさわしい形」で、「環境を通して」、「一人ひとりに合わせて」……ということになっていますから、よほどしっかりとした教育課程や指導計画を立てて、そのうえで一人ひとりの子どもの発達を見ていかなければなりません。しかも、幼稚園の教育は、小学校以上のような教科教育ではないので、なかなかその成果が見えにくいという問題があります。保護者にも「遊んでばかりでは……」「文字の教育はしないのですか？」などと、目に見える形で評価できる保育内容が求められることがあります。幼稚園の教育が、子どもの生涯にわたる基礎となっているのだということをいかに保護者へ伝えていくかということが、今回の改訂に際してますます重要になってくると思います。

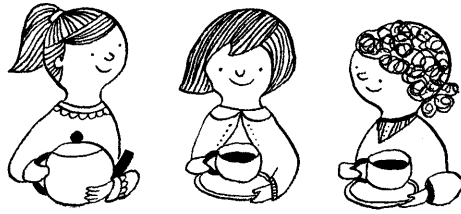
また、学校教育法の第四章第四十二、四十三条にあるように、小学校では学校評価、保護者への情報開示が求められます。私たち幼稚園教員は、一人ひとりの子どもの発達についての評価や日々の指導計画の振り返りはいつもしていますが、園全体の評価については、まだまだではないでしょうか。何を、どのように評価したらよいのだろうか……と思う園が多くあるように思います。幼稚園の教育は、幼稚園教育要領にのっとって進められているとはいえ、その保育の実際はさまざま多様性が

あります。全ての園に当てはまる評価基準はないので、文献や先行研究を参考にしながら、その園独自の評価項目や基準を定めていくことが必要でしょう。園の全教員がそれを共通理解したときに、保護者に「うちの園ではこういうことを大事にして三年間を過ごしています」と自信をもって伝えることができるでしょう。小学校も幼小連携に力を入れており、先日は、近隣の小学校から園の教育課程を教えてほしいという要望がありました。幼稚園の教育がどういう形で初等教育の基礎になっているのかを互いに考える必要もありそうです。

### 特別支援教育への取り組み

入園前に保護者から相談があつて「障碍<sup>がい</sup>」がわかっている場合もあるでしょうが、いわゆる「気になる子」は、入園後の保育の中で「あれっ」と思い、そこで教員の配置をあれこれ工夫しながら保育に当たることになります。今は、どの園でもこのような子どもたちと、試行錯誤しながらかかわっておられるでしょう。その場合、その子どもの抱える困難の理解をし、その子の課題に沿ってかかわりたいと思います。同時にその子のいるクラス全体の保育も考える必要があります。保護者にもその子の課題を知っていただき、専門機関の受診をすすめる場合もあるでしょう。保護者の気持ちも支える必要があります。こうしてあれこれ考えていくと、特





別支援というのは単に障碍のある子を受け入れればよいというのではなく、その子どものもつ困難の理解、そしてそれに基づく個別の計画作成、担任などへの実際の指導の支援、保護者への支援、連携した専門機関とのやりとりなどたくさんの仕事があることに気づきます。それで、「特別支援コーディネーター」と呼ばれる役割の人が必要だということになるでしょう。しかし、多くの幼稚園ではなかなか人的余裕はありません。誰がその役割を担うのか検討してみると、その園に必要なことが見えてくるのではないのでしょうか。

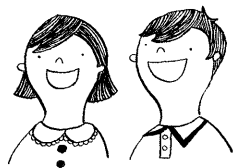
しかし、その人だけに任せるのではなく、保育そのものは園全体の教員チームで行うことを忘れてはならないと思います。今は、できる限りどの子も一緒に保育を進めていくのが世界の潮流です。単に一緒にいるだけではなく、その子も周りの子どももよりよく生きることができるような体制をつくりたいと思います。

### 終わりに

今回の幼稚園教育要領の改訂では、幼稚園教員の専門性がさらに増してきたの思いを感じています。子どもとは楽しく、生き生きと保育・教育を進めることが大事ですが、保護者や関連機関や小学校とも「幼児教育」についてさらに深く語れるように専門職としての力量を磨きたいと思っています。

(文京学院大学)

特集 子どもと音



子どもたちから教えてもらった

音楽の学び方

加藤 富美子

子どもたちから教えてもらう

東京学芸大学附属幼稚園長として子どもたちと四年間を一緒に過ごしました。その毎日の中で、音楽の学び方について、本当にたくさんさんのことを子どもたちから教えてもらうことができました。

ここでは、その中から昨年の二〇〇七年度を例に、幼稚園でのさまざまなシーンを思い起こしながら、考えていきたいと思います。

七月のげいじゅつかんホールでのようちえんの五十さいのおたんじょういわいで、「ようちえんのうた」のすてきなうたごえ、わすれることができます。

そして、「よるまでようちえん」でせんせいたちといっしょにあそんだオペラ「どんぐりと山猫」。みんながげんきいっぱいのだんぐりっことなってくれて、ほんとうにびっくりしました。あきには、大きいのが、とんがったのが、まるいのが

やら、いろんなかたちのすてきなどんぐりの絵がいっぱい生まれましたね。そして、十二月のこども会では、ほしぐみさん、つきぐみさんは、ひとりひとりと、みんなちがつた、きらきらかがやいたどんぐりになっていました。(東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎修了記念文集「つくし」、二〇〇八年三月より)

子どもたちが作詞し先生たちが曲をつくって生まれた『ようちえんのうた』。この歌をうたうときとても生き生きとしたうれしそうな子どもたち。そして、絵本『どんぐりと山猫』を基に、読み聞かせやオペラ遊びや造形活動や体遊びをしながら、一年を通して大きく育っていった子どもたちの様子。その姿をここから読み取っていただけると思います。

これらの表現を生む基礎となった幼稚園の保育計画をかいつまんで補足しながら、幼稚園の子どもたちから教えてもらった音楽の学び方の幾つかを、こ

れからまとめていくことにします。

## 生活とつながった音楽環境が 学びの基礎となる

生活とつながった表現。これは小金井園舎がこだわってきたテーマです。アヒル池での生き物たちのかかわりや、一年にわたるお米づくりを通して、子どもたちは自然の素晴らしさや厳しさを体験してきました。『ようちえんのうた』は、その体験を基に、二〇〇六年度の五歳児の子どもたちが作詞したものです。この年の指導講師をお願いした青木久子先生(青木幼児教育研究所所長)の「生活したことがどのように表現されるかがとても大切」という助言がもつ意味を、『ようちえんのうた』を通して深く感じ取ることができました。

そして、この生活の中の思いや願いとつながった歌が、幼稚園の日々の暮らしの中でうたい続けられ

ているという環境は、年少組や年中組の子どもも含めて、幼稚園のすべての子どもたちが音楽を学ぶ基礎となっています。

始業式で進級したばかりの四歳児のこどもたちが聞かせてくれた元気いっぱい「ようちえんのうた」。この春卒園していったこどもたちががつくって歌い聞かせてくれていた「ようちえんのうた」を、あんなに小さかった幼稚園の末っ子たちがこんな元気に、そしてこんなに気持ちを込めて思い思いの表情で歌っている!! その驚きは大変なものでした。これは、「ようちえんのうた」が幼稚園でのこどもたちの暮らしのなかから生まれた歌だったからこそなのでしょう。幼稚園での暮らしをみんなで一緒に紡ぎながら、一人ひとりのこどもたちが、そのなかで自分の表現を見つけ、それをまた伝え合っていくのです。(東京学芸大学

附属幼稚園小金井園舎「けやき」、二〇〇七年四月より)

### 音楽を体の動きとつなげる

幼稚園の子どもたちは、どんな音楽でも、体全体でそのリズムや音の特徴をつかむことが、とても上手です。それを、体の動きとつなげて表現することができます。

ある日の中央テラス、五歳児の一人の男の子が、トガトンという竹の楽器二本をそれぞれの手に持ち、単純なリズムを叩き続けています。本当に長い時間、そしてこれを毎日毎日、叩き続けているのです。よく見てみると、この子は決して手だけでトガトンを打とうとしているのではなく、ただ体全体を使って、時にはステップも入れてこの二拍子を打ち続けているのです。今までに聴

いたことがある、トガトンのどの演奏よりも、この子が出し続けるトガトンの音はすてきでした。

この男の子をはじめとし、竹の楽器に関心をもった五歳児の子どもたちは、十二月の「こどもかい」で、『どんぐりと山猫』の伴奏チームを担当し、素朴ながらも芯が通ったリズムで、お話全体を進行させていました。

ここからは、自分のもっている体のリズムを音楽とつなげることで、体のリズムがそのまま音楽の表現につながっていくことの大切さを、子どもたちから教えてもらうことができました。

### 言葉のリズムを

### 音の動き・体の動きとつなげる

子どもたちは、言葉がもっているリズムをとらえ、それを音楽にしてしまうことがとても上手で

す。そのときには、自然と体の動きともつながっていきます。

『どんぐりと山猫』（宮澤賢治作）のどんぐりたちが登場するシーン、「どんぐりどもが、ぎらぎらひかって、飛び出してわあわあわあわあ言いました」の「わあわあわあわあ」のリズムの面白さを、絵本の読み聞かせでとらえてしまった子どもたち。それに、先生たちが歌うオペラ「どんぐりと山猫」（萩京子作曲）での表現を聴いたことも手伝って、「飛び出して」を聞くか聞かないうちから、「わあわあわあわあ、わあわあわあわあ」と元気いっぱいの声とそれぞれ思い思いの体の動きで表現しながら、部屋いっぱいに転がり続け、それを楽しんでいました。

子どもたちは、歌詞の意味をとらえる前に、言葉

の語感にとっても敏感です。言葉の語感、言葉のもつリズムを、そのまま音の動きや体の動きに拡大して表現することができず。

言葉の語感をとらえ、それを音の動き・体の動きの表現として表していくことが、その言葉のもっている意味をより深く表現することにつながる。このことは、歌の学び方としてとても重要なことだと、ここから気づかされました。

## 作品との出会いが

### 生活と表現をつなげる

昨年はたまたまどんぐりの生り年だったこともあり、遅い秋の園庭には大きいどんぐり、丸いどんぐり、とがっただんぐり……と、「どんぐりと山猫」に登場するどんぐりたちさながらの、さまざまな形・大きさのどんぐりが、毎日毎日、拾い

きれないほど転がっていました。

こどもたちは、「おおきなことだよ、おおきいのが一番えらいんだよ」「そうでないよ、わたしの方が」と、夏に遊んだオペラ「どんぐりと山猫」の表現を思い出して、大騒ぎで歌い動きはじめました。そして、保育室では、画用紙の画面いっぱい、いろんな形、さまざまな色のどんぐりたちが次々と生まれていきました。

それだけでなく、フラフープや飛箱や縄跳び、あるいは阿波踊りや七頭舞など、体の活動や体の表現をする時のイメージづくりに、「まるい」「背が高い」「とんがった」など、どんぐりを形容する表現がつながっていったのです。

ここからは、絵本『どんぐりと山猫』、オペラ『どんぐりと山猫』という作品との出会いが、どんぐりをめぐる、自然への気づき、表現の高まり、そ



してその両者の強い結びつきを生むことになったことがわかります。

子どもたちは、優れた文学、音楽、演劇などの作品との出会いから、それを活かして生活と表現を強く結びつけていく力をもっている。このことに気づいたこともまた、私にとって大きな学びでした。

**教えてもらったことを活かすために**

幼稚園の子どもたちから教えてもらった、音楽の学び方への気づきのさまざま。これを今後に活かすためにはどうしたらいいでしょうか。

幼稚園の先生たちと一緒に考えていきたいことは次の二点

です。一点目は、ここに気づくことができた子どもたちの音楽の学び方を、保育の計画や教材選び、指導方法に活かしていくためには、どうしたらいいかです。二点目は、子どもたちの保育の見取りの大切さについてです。ここに挙げた例はほんの一例で、毎日の保育の中からは、まだまだ子どもたちから教えてもらうことができる音楽の学び方がたくさんあるはずです。

そして私にとってのもう一つの大きな課題は、子どもたちから教えてもらったことを、幼稚園にとどまらず、広く音楽教育に活かしていくことです。なぜならば、これらはすべての人々がすべての音楽を学ぶときの基礎となるものだ、強く思うからです。たくさんさんの気づきをもろうことができた学大附属幼稚園の子どもたちに心から感謝しながら、今後に向けて歩んでいきたいと思っています。

(東京学芸大学 音楽・演劇講座)

# 子どもの歌をめづって

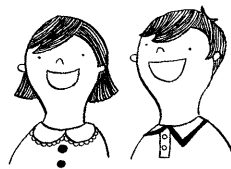
—「あいさつの歌」は今—

「しつけの歌」をご存知ですか

二〇〇八年の今、日本では世界中のさまざまな音楽文化に触れることができます。それ故、子どもたちがうたっている歌も、多岐にわたっています。

そのような状況の中で、幼稚園・保育所で子どもがうたう歌は、『保育唱歌』（一八七七／明治十年）、『幼稚園唱歌集』（一八八七／明治二十年）の時代から、大人がうたう歌とは別の、子どものための歌が考えられてきました。それらは、日本の伝統音楽の流れを汲むわらべうたの類であったり、明治

角藤智津子



時代以降に日本に入ってきた、世界のいろいろな地域の音楽手法による歌であったりします。

子どもの歌の中には、保育所や幼稚園でうたわれることのある、しつけにかかわる内容の歌があります。朝、昼食、帰りの際にうたうあいさつの歌や、片づけ、歯磨き、静かにするなどの内容の歌が、これにあたります。

私自身は、子どもたちには、音楽の美しさ、楽しさを味わってほしいと考えておりますので、

「○○をしましょう。××をしてはいけません」の内容で子どもの歌ができあがっていることには、



抵抗感をもっています。

### 「しつけの歌」は

うたわれなくなつたのでしょうか

一九九〇年代に、何人かの保育所の先生から、

「あいさつやしつけに関するいわゆる生活の歌は、  
本当にうたわれなくなりましたね」

という話を伺いました。あいさつやしつけに関する  
歌は、本当にうたっていないのだろうか、どのよう  
な状況にあるのだろうか、ということがこのころか  
ら気になりました。

確かに、ある出版社の幼稚園教諭・保育士（保  
母）の養成を目的とした音楽のテキストを見てみま  
すと、一九八一年の版にはしつけの歌が九曲掲載さ  
れています。それが、一九九〇年の版、二〇〇八年  
の版には、一曲も載っていません。

一九八〇年代に、ある保育者養成の学校で音楽を

担当することになったとき、上司から、

「朝の歌と、お弁当と、帰りの歌さえ教えてもらえ  
れば、あとは好きなものを教えていいですよ」

という話がありました。その先生は、あいさつの歌  
は、とても大事なものと考えていたのです。

『おばけなんてないさ』や『カレーライスのうた』  
でおなじみの作詞・作曲家の峯陽さんは、一九八〇  
年代に、

「ところが実際保育園で昔からずつと行われている  
ことは、おかたづけ歌、手を洗う歌、おはようの  
歌、おやつ歌、食事の歌、さよならの歌……など  
で、毎日、印をおしたように子ども達の要求や感動  
などに関係なくうたわれています。」

と書かれています。

一九八〇年代は、しつけの歌にとって、転換期  
だったのかもしれませんが。

## 「あいうの歌」の実態調査から

「しつけの歌」の存亡が気になっていた私は、「しつけの歌」の中の「あいうの歌」が、幼稚園・保育所の中で現在もうたわれているのかどうかについて、調べることにしました。研究グループで、朝、昼食、帰りのあいうの歌がどのくらいうたわれているのかの調査を行いました。

幼稚園は、平成十九年の調査です。<sup>4</sup> 何らかの「あいうの歌」を毎日の保育の中で、定期的に一曲以上うたっている幼稚園は八五・一パーセントでした。幼稚園では、昼食のあいうの歌が一番多くうたわれており、朝の歌がこれに続きました。

保育所は、平成十六年の調査です。<sup>5</sup> 何らかの「あいうの歌」を、毎日の保育の中で、定期的に一曲以上うたっている保育所は四一・一パーセントでした。保育所では、帰りのあいうの歌が一番多くう

たわれており、朝、昼食の歌がこれに続きました。おやつの時間がある保育所の特色として、幼稚園ではまったくうたわれていないおやつの歌が、一四・二パーセントの保育所でうたわれていました。

「あいうの歌」をうたっている理由としては、「園の伝統になっています。創立以来、うたい続けています。習慣になっています」

という答えが主でした。

「なぜうたうのだろうかということを、考えたことはありませんでした。回答する中で、初めてこれらの歌をうたう理由を考えてみました」

という答えもありました。また、

「活動の明確な区切りとしてうたっています」

という答えもありました。

メロディーが美しいなどの音楽的な価値を見いだして、歌っているというコメントはほとんどありませんでした。

「しつけの歌」の中の「あいさつの歌」は、二十一世紀初めの幼稚園・保育所においても、うたわれていることが明らかになりました。

もちろん、「あいさつの歌」を全くうたっていない幼稚園・保育所がたくさんあることも忘れてはなりません。うたわない理由としては、

「ほかによい曲はたくさんありますので、特定のものを習慣的に毎日うたう必要はないと思っています」

「以前はうたっていました、単に決まりごと・習慣でうたうことに必要性を感じないので、今はうたっていません」

という答えがありました。

音楽を愛する者ばかりの研究グループ構成員は、保育者は、「あいさつの歌」の音楽的な価値は見いだしてはいないという調査結果に、

「音楽的な価値を見いださないで、幼稚園・保育所

で子どもにうたわせているのは、くやしい」と、大激論になりました。

「理由はともあれ、たくさん幼稚園・保育所でこれらの歌がうたわれているという事実は、捨ておくことはできないのではないか」

「ピアノ伴奏の多くは、簡易なものとなっていて、I、IV、V度の和音しか用いていない。保育者は、伴奏を弾くことは簡単にできるが、音の響きとして物足りないと感じるのではないかと、いろいろな意見が出してきました。

作曲が専門の研究グループの一人は、昼食時の歌に関して新たなピアノ伴奏を編曲しました。「…正当な和声法とポリフォニー書法に基づいた『伴奏例』であるということで、昼食時の歌のI、IV、V度の和音による伴奏しか知らなかった耳には、この編曲からこれまでにない音の響きを感じました。



### 「あいさつの歌」の明日

保育において、子どもたちとどんな歌をうたおうかと考えるときには、幼稚園・保育所の教育・保育方針を基に、子どもたちの発達や状態を考慮して、目的をもって選曲します。現在は、そうした結果、「あいさつの歌」が選ばれているのかもしれませんが、ずいぶん前ですが、通勤の道の途中に幼稚園があり

ました。毎朝、朝のあいさつの歌をうたっていました。そのうたい方は、テンポがものすごく速いのです。ピアノの伴奏がこれ以上速くは弾けないというほどの速さなので、子どもたちの歌もそれに合わせ、早口言葉のようでした。

うたうことを選んだからには、うたい方も考慮していただけだと思います。

小学校一年生の一学期の体験です。朝の集まりの会のとき、『あいさつ』（小林純一作詞、信時潔作曲）をうたいました。最後の部分は、「ラッタラッタラン」と右手を高くかざし、きらきらと揺らしながらスキップして一回転しました。とても楽しかったですし、その時間を待ち焦がれていたのですが、先生は、一学期だけで、それ以上は、続けられませんでした。今にして思えば、保育所・幼稚園と小学校のつながりをスムーズにし、児童がうまく小学校生活になじむようにするための、工夫であった

のではと想像します。幼稚園・保育所でうたっていることを踏まえた場合には、このような用い方もあるのだと思います。

また最近の経験です。男性保育者が、ギターをつま弾きながら、とっても優しい声で、『さよならのうた』（高すすむ作詞・渡辺茂作曲）をうたいました。子どもたちは、先生と一緒に、中くらいの大きな声で、穏やかにうたいました。朝から保育に参加させていただいた私は、なぜかほっとした気持ちになって、すてきな音楽だと感じました。このような保育実践を教えていただくと、「あいさつの歌」も、こんなふうにすてきにうたうことができるのだとわかります。

あいさつは、言葉にして表現することが第一です。熟考の末「あいさつの歌」が保育者を選ばれるならば、「あいさつの歌」はまだ明日があるかもしれません。

大事なことは、どの歌にせよ、保育者は、なぜ保育に用いるかをしっかりと考えて歌を選ぶことです。そして、音楽の美しさ、楽しさを子どもたちに伝え、子どもたちに感じてもらえればと思います。

（東洋大学 ライフデザイン学部 生活支援学科）

## 註

1 日本で最初の幼児用唱歌集です。一八七六年にできた日本で最初の幼稚園である、東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）附属幼稚園で用いるために、宮内庁式部寮雅楽課に依頼し、一八七七年から一八八三年にわたって創作された約百曲から成っています。出版はされませんでした。

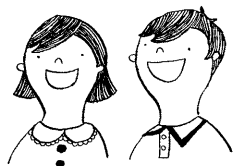
2 文部省編纂の最初の幼児用唱歌集です。一八七九年にできた文部省音楽取調掛（現東京芸術大学）が、西洋の曲を含め二十九の唱歌を選んでいますが、後に、別の編者による「幼稚園唱歌集」が出版されていますが、異なるものです。

3 峯陽『峯陽うたの本』すばらしい人生のうた」ばるん舎 五十一―五十二頁 一九八〇年代らしいが発行年の記載なし

4 角藤智津子・古川哲也・加藤明代・大輪公宅「保育所における『二日の流れの歌』の現状と音楽保育教材としての今後の課題」明研図書 子どもの健康福祉研究 二十五―三十二頁 二〇〇六年

5 角藤智津子・古川哲也「幼稚園における『二日の流れの歌』の現状―A県・B県における調査から」明研図書 子どもの健康福祉研究 一七頁 二〇〇八年

6 4に編曲が掲載されています。



## 『リズム』という絵本

真砂 秀朗

「赤ちゃんのための絵本を作ってほしい」という企画をいただいて、この仕事に取りかかったのは、もうずいぶん前のことです。

そのときにまず思い出したのは、自分が親になったころ、本当に子どもに与えたいと感じる絵本が無かったという、僕としては切実な経験なのでした。

本屋さんに行って探してみても、そこに描かれているのは乗り物やアイスクリームや、人工の物がほとんどです。また動物などの描き方にしても、アメリカンアートのように何か温かみがあってシンプルな表現のほうが、赤ちゃんは喜ぶのではないかなあ

と感じてしまうのです。

そして、生まれてきて初めて体験する世界で、いきなり近代的なものや具体的なことよりも、もっと自然で抽象的で優しい感覚を、お母さんと一緒に感じられるような絵本はないかなあという思いをいっていたのです。

当時アーティストとして駆け出しの僕は、表現の基礎を創るうえで、自分としては何か限界のようなものを感じていた近代的な文明のオルタナティブとして“ネイティブ文化”にとっても惹かれていました。

そしてまだ文明の波が押し寄せていなかったアジ

アやアフリカの地を旅しては、ネイティブな音楽やアートに接することがとても楽しかったのです。

何よりもその地での、自然に属している時間や空間、そしてその中で生活を体験することで、文明の中で育った自分の感覚をもう一度洗い直すことができたでしょう。

そんな旅の思い出を少しお話ししましょう。

バリ島は、生命の気に満ちている所です。

少し山の方へ行くと、見事な棚田が連なっています。火口湖からの水路を各村々に張り巡らせ、これだけたくさんの田んぼができている、まさに人と自然の折り合った風景です。そしてその折り合った姿こそ、美しさを感じさせてくれます。

初めてのこの島への旅は、まだお乳を飲んでいた赤ん坊の息子と妻の三人での滞在でした。竹で建てられた民宿では、いつもおばさんやお姉ちゃんが息

子をだっこしたり、バナナをすりつぶした離乳食を食べさせたりして、とても大切にしてくれます。

赤ちゃんと一緒に行ったおかげで、村の人々が赤ちゃんを神聖な存在として対応している感性に触れることができたし、自分たちも赤ちゃんの視点で自然の中の生活の一コマ一コマを感じることができたように思います。

風のざわめき、椰子の葉のきしみ、鳥たちのさえずり、いろいろな音が一つになって聞こえています。その中に、カラコロカラコロと音階になった音も混じっています。よく見ると田んぼの中に竹で作った風車が立っていて、風が吹くと、音が出る仕組みになっています。鳥を追うために老百姓さんが作ったものですが、風を楽しむアートのようにも見えます。

テラスに置いてあった竹の木琴は、ドレミソラの世界共通の五音階で、乾いた竹の丸い響きがとても

気に入ってしまいました。

「この楽器はティンクレックと言って、私が若いころは男の子はみんなこの曲を練習して、女の子を誘ったものだよ」と言いながら民宿の主人が教えてくれた曲を練習するのが、僕には日課のようになっていました。

うつすらと日が暮れてくると、どこからかガムラン音楽が聞こえてきます。音をたどって行くと、村の集会場では、昼間田んぼをしていた男たちがガムランユニットを組んで練習をしています。子どもたちも周りで見たりまねをしたりしています。こんなふうにして演奏を覚えていくのでしょうか。

ここでは人と自然の境界線がはっきりと固定しているのではなく、連なり合ってゆったりと揺れているようなのです。自然の音の中にリズムやメロディーが聞こえ、音楽の中に自然の気が満ちているようです。



西アフリカはリズムの宝庫です。

中でもジャンベというタイコは、三種類のたたき方で三つの音階を出します。まるでイントネーションを含んだ言葉のようでもあるのです。ですからリズムパターンを伝えるときも音符ではなくて、

グンゴドッパ　グゴドパ

グンゴドッパ　グゴドパ

とか、

ゴド　パッティパ

ゴド　パッティパ





という具合に口で伝えるのです。リズムといっても最初から唄と一緒にあるのです。

でも本当にアフリカのリズムに出合ったのは、後になって西アフリカを旅したときに滞在した街で、タイコを習ったときのことです。

毎日、公園の決まった場所に座っている先生の所へ通って、先生が伝えてくれるのと同じリズムパターンをできるようにするまで、口と手をまねながら繰り返し繰り返し練習します。それができるようになると、違うリズムパターンを覚えてくれるのです。そんなことをしているうちに、ふと思いました。

あや取りのようだなあ、これは……手を覚えて相手と遊びながら、どんどん高度なパターンになってゆく。

織物のようにもあるなあ……幾つものパターンが重なり合って、一つの模様が浮かび上がってくる。その模様にはリズムとしての名前が付いているのです。そして伝統的なリズムには、目的や効能があります。農耕の祭りのリズム、癒しのリズム、植物を育てるリズム、儀式のリズム、というように。

「リズム」という言葉を音楽用語と思っていた僕にとって、アフリカのリズムは、うれしいときや悲し



いとき、また聖なるときに、体と自然をつなげてくれる道具なのだということを、教えてくれました。

文明は、長い時の流れの中で土から栄養をもらって育つ大樹のように、自然という基盤の上に形創られてきました。自然が豊かでなかったら、文明も存続できません。

人も同じだと思うのです。お母さんのお腹の中で長い長い進化をし、産まれたときはまだ自然に属しています。歩くようになって社会と接し始め、自我に目覚めて文明に参加していくのでしょうか。

数々のネイティブブランドを訪れた旅から、そんなことを僕は感じていました。

さてさて、そういう訳で、赤ちゃんのための絵本を作るうえで大切にしていたことは、まず「赤ちゃんにとっては自然そのものであるお母さんとのコミュニケーションが、無理なく楽しくできるということ」、そして「表現する形は自然の中にあるモチーフをできるだけ優しくシンプルにすること」です。

そして自然の中での生活をテーマにした七冊の絵本ができあがりました。

『ひかり』『ながれ』『かたち』『ことば』『いのち』

『きもち』『リズム』（三起商行）。七冊並べると虹の七色になるので、「レインボウブックス」というシリーズです。このうち五冊には言葉がいつさい付けありません。それぞれのテーマが絵だけのストーリー

リーになっています。お母さんが自分の言葉で、赤ちゃんに語りかけてほしいからです。きっといろいろな物語が生まれるでしょう。

『ことば』はヒラヒラとかユラユラという擬態語と絵で構成しました。擬態語は自然領域に最も近い、いわば赤ちゃんに近い言葉だと思うからです。

そして『リズム』は、アフリカの旅の所でお話した、口で伝える西アフリカのリズムパターンと、それに対応した農作業や踊りの動作を明るくシンブルに描いたものです。

言葉というより、お母さんの音声がアフリカの四拍子や六拍子のリズムになって赤ちゃんに伝わるのです。

読者のアンケートによると、うれしいことにこの『リズム』は赤ちゃんにとっても人気があるようです。

この絵本はブックスタートという、生まれてきた

子どもに最初に与える本の大切さを考えるNPOの推薦図書になったこともあって、ずっと版を重ねてきました。

今改めて奥付を見ると一九九〇年初版とありますから、もう十八年も経っています。当時この絵本を見ていた赤ちゃんたちが、もうそろそろ成人を迎えるのですね。

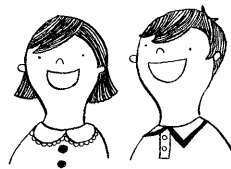
(アーティスト・ミュージシャン)



▲イラスト：真砂秀朗『リズム』より

## 響き合う音 響き合うからだ

猶原 和子



音が意味をもつとき、うたいだす

小学二年生の音楽の時間のことです。歌集の中からうたいたい曲を四人がリクエストし、みんなであうたっていました。『歌はぼくらの友だち』（石井亨・作詞／作曲）のリクエストに「やったあ！」の聲が上ります。ふと見ると、丸い輪の中から少し離れて弘志君が手遊びをしていました。気がついた傍らの子が「ねえ、ちゃんとして」「口をあけて」と、弘志君にきつい言葉を投げ掛けています。確かに一見すると、彼は興味がなさそうにみんなに背を向けるようにし

ています。私は気になって、ずっと弘志君を見ていました。するとおもしろいことに気がついたのです。

彼は前述の曲のときは、つまらなさそうな顔をしてみんなに背を向けて口も開きません。しかし、『未知という名の船に乗り』（阿久悠・作詞／小林亜星・作曲）の前奏が始まると、ふっと表情がゆるみ、からだが音楽に合わせて揺れ始めたのです。仲間の声に合わせて口も開き、やがて歌集をめくって曲を見つけ、歌詞をたどり始めました。覚えているところになると、顔を上げ、仲間の方に向っていい表情でうたっています。同じように『トレロカモミロ』（F・マレスカ・

作詞／坂田寛夫・訳詞／M.バガーノ・作曲)のときも、歌の途中からみんなの輪に近づいて入り、楽しそうにうたいました。このことは何を意味するのでしょうか。

弘志君にとって、たとえ周りの子がうたつていても、興味のない曲は周回から聞こえる生活音と同じように、彼にはまだ「意味をもたない音」にすぎないのです。それに対し、『トレロカモミロ』は楽しい世界を仲間と共有できる、そんな予感のする心地よい音楽であることを彼のからだが生きています。

ある子にとって楽しい音楽でも、ある子にとってはつまらない音の場合もあることを、私たち教師はきちんと踏まえることが大切だと思います。どんなに教師が「この曲は世界中で有名なモーツァルトがつくったすばらしい曲です」と言っても、その曲を好むか好まないかは、その子の生活やその地域の文化などを背景に、一人ひとり異なるのです。その子の情動を揺り動かし、必然性をもったときに、音は

音楽となります。

ともすると、一緒にうたう・演奏するといったふうに、音楽は「同質性」を求める道具に使われがちです。しかし、個々の子どもの音に対する興味の異なりを尊重することが大事で、このことがひいては、「異質性を排除しない」公共性のある表現者を育てることにつながると思っています。



▲友達の選んだ曲と一緒にうたう

## 耳を澄ます

私は低学年で、トーンチャイムを用いた「聴く」活動をよく行います。トーンチャイムは音楽療法などでもおなじみの楽器です。

授業の中で、ひと息ついたとき、まず私がチャイムを一本取り出します。「音が聞こえなくなってきたと思ったら、手を挙げてね」。最初は、聞こえたと思った瞬間に手を挙げ、周りを見て慌てて引つ込める子や、まだ聞こえそうだとずっと見つめる子などさまざまです。慣れてくるとずっと落ち着き、静かな空間にチャイムが柔らかく響きます。目を閉じて聴くと、また世界が一変します。

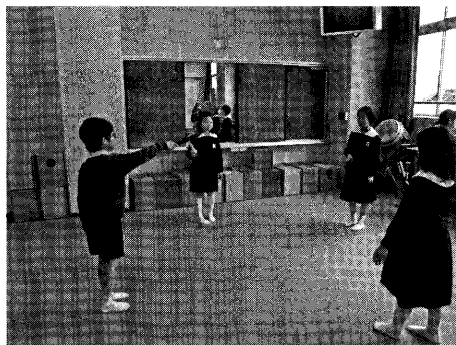
音の動きを視覚的に意識させることもあります。トーンチャイムを鳴らしながら動かすと、空気の振動方向が変わります。「あ、見えたよ、音が動いているのが見えた」と驚いたように子どもたちは言い

ます。一緒になって手を動かす子もいます。理屈ではなく、空気が音を伝えていくことをからだで感じているのです。

何人が交代で鳴らしてみます。トーンチャイムの大きさや鳴らし方で、音の響き方が異なることも実感します。「静かにしなさい」ではなく、「耳を澄ましたくなる」活動を取り入れていくことは、生活音や社会音が氾濫している今だからこそ、必要なのではないのでしょうか。

## 他者とともに音を生みだすからだ

今度は、教室の四隅に子どもが一人ずつチャイムを持って立ちます。ある子からほかの三人の誰かへ音を届けます。もらった子はその子からの音が消えたと思ったら、次の子へ向けてチャイムを鳴らします。四人とも鳴らしたら、最後の子の音が消えたときに四人一緒に鳴らそうという約束です。



▲響きをからだで感じ、合わせる

最初の子が音を鳴らしました。次の子は音をよく聴いて次の子に回します。けれども次の子はうれしくてすぐにチャイムを鳴らしてしまいました。さすが周りの子が「まだ聴こえていたよ」。次第にどの子も音に注意深くなります。

いよいよ最後に四人が合わせるところです。ここでは「せーの」など言葉を使わないで合わせようと

いう約束です。お互いの顔を見ながらポンポン。残念！ ずれてしまいました。

わずかな時間でも、毎回繰り返していくと、少しずつタイミングが合うようになります。中にはグループで「最後の音を聴いて、心で1、2、3と数えて鳴らそうよ」「最後の人の目をよく見ていたら合うんじゃない？」などと工夫する姿も見えてきます。外に向かって音を発信するときには、その音（表現）がからだの構えと深く結びついていることを、子どもたちは他者とともに体験から学んでいます。

### 聴き合うからだ

「聴く」という行為は、発信者にとっても大切だということがおわかりいただけたと思います。また、受信者にとっても「聴く」ことは受動的でなく能動的な行為にしていくことが大切です。

ある日いつものように一人の鳴らしたチャイムの響

きをみんなでじっと聴いていると、突然亮君が隅に走り、チャイムを持つ子の前にびったり座りました。「どうしたの？」と尋ねると「この音をすぐそばで聴きたかったの」と答えました。両耳に手を当て、からだをチャイムに向けています。私も並んで聴いてみました。すると、からだがチャイムの音色に包まれて、違う世界に入り込んだ気持ちになりました。「ああ、これを亮君は感じたかったのだな」と思いました。何人かも同じようにしています。ほかの子も熱心に耳を傾けています。亮君の一言が、子どもたちに「聴く」からだを促したのです。

いい緊張感が教室に漂っています。いよいよ四人が合わせて鳴らす順番がきました。チャイムを持つ子だけでなく、周りの子も息を詰めて待っています。ほぼ同時にチャイムが響きました。その瞬間、目を閉じていた子どもたちが一斉に顔を上げ、自然と拍手がおきました。

## ミュージッキングという考え方

クリストファー・スモール（アメリカの音楽教育学者）は、自ら音楽を生みだしたり、他人の音楽に耳を傾ける、あるいは、その活動を手助けする、踊る、語るといった、音とかかわるすべての活動を、「ミュージッキング」という動詞で表しました。これは、楽器の演奏や鳴り響く音だけを音楽とするのではなく、心を癒したり思いを訴えたり、互いに分かち合うといった社会（他者）とつながる行動としてとらえた言葉です。この考えで幼児を見つめると、たくさんのミュージッキングを発見することができそうです。

音楽は単独に存在するのではなく、社会の文脈に位置付けており、その時代やかかわる人々との関係の中で常に変化し続けているものだにとらえると、子どもの表現行動・からだの動きをていねいに観察す



ることが、音楽的に意味をもつということがわかりただけのではないのでしょうか。

### 脳科学の立場からの示唆

脳科学者の小泉英明氏によると、生まれて五日以内の新生児の脳をイタリアで調べたところ、母国語のイタリア語を聞くと聴覚野の周辺が強く反応するのに対し、テープを逆回しにすると、ただの音としての反応しか示さないという結果が得られたそうです。新生児の段階から、人は自分にとって意味ある音を選んで学んでいるのですね。

また小泉氏は脳の中の新しい皮質は知識を蓄えたりするが、情動は古い皮質にかかわることが多いので、ここを育まなければならないと述べています。音楽を感じるような部分は意識の下、つまり実体験を積み重ねることによって鍛えられるのだそうです\*。幼いときから知識を詰め込もうとしている現

在の社会に対する大きな警告です。

弘志君と一緒にうたいたいくなって仲間になんて思っていたこと、あるいは亮君がチャイムの下で感じた音の世界。このような体験が人を豊かにしていくことを脳科学の研究は教えてくれています。それぞれの興味・関心に基づいた表現行動を受けとめ、より豊かな体験となるような授業内容や方法を工夫すること、その一方で「この音楽は嫌いだ」という感情も認め、「嫌いな音楽を強制しない」ことも心掛けたいと思っています。

音楽は人を優しく包み込むことができますが、一つ間違えると政治的にもおそろしい兵器になります。一人ひとりの子どもが他者とともにより豊かな表現者になっていくような授業をこれからも考えていきたいと思います。（お茶の水女子大学附属小学校）

※ 小泉英明「教育における脳科学の可能性」『児童教育』  
⑱、お茶の水女子大学附属小学校、二〇〇八年

## 新しく生きる

津守 眞(M)

津守 房江(F)

久しく『幼児の教育』にご無沙汰しました。

という聖書の言葉を、何度も思いめぐらしていました。

『たじろぐということ』

M 退院して五か月がたちました。私はその間に「新しく生きる」ということを、何度も考えました。脳の出血のために突然字が書けなくなったのですから、その中でどう生きるか。「人は新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」

M そこで出会った『たじろぐ』という言葉は、ずっと私の現実の生活を進めるうえで大事なキーワードになりました。

F 向こうからやってくる車にあなたが何十メートルも前から立ち止まって、体が動かなくなることを主治医に話したときに返ってきた言葉ですね。

M 脳神経外科を専門とする医師が、高度な画像診断（CT、MRI）だけでなく「たじろぐのですね」と普通の言葉で言われたことは、不思議な気がしたのです。でも、そのことは前方から来るものに対するおびえだし、未来に向かう自分のおびえかとも思いました。さりげなくこのような言葉で言われ、自分の問題を意識化できたので、心がずっと軽くなりました。

私はリハビリの先生の前に行って字の練習をしました。でもうまくいかないのです。たとえば、四月十一日のノートには「よ」という字を書こうとして十度以上書き直してしまった。とても疲れた。」と平がなで書いてあります。障碍<sup>が</sup>をもつ

愛育養護学校（以下愛育）の子どもたちと同じに私も一つことにこだわる自分があります。主治医からは「できないことを無理にやろうとしないで、できることからやっていくように」と言われました。これは私たちが子どもたちにいつも心掛けて、保育の中でやってきたことでした。自分の問題と保育のことが結び付いた出来事でした。子どもたちと自分がもつと近い存在になりました。

### 保育の場に出ると

最近では愛育の現場に一人でバスに乗って一週間に一、二回行きます。

M 私にとっても家族にとっても、愛育に行くことは安心なことです。役に立つかどうかは別として、子どもや保育者の中にいてうろうろしているだけで私は元気になれるのです。保育の場が最近

活気に満ちていることが何よりうれしいですし、リハビリにもなります。

私は保育に出たとき、出会ったところから始めるということでは以前と同じです。

しかし、その日その日は「新しい自分」になっているのです。たじろがずにくさくさと飛び込んでそのことをやる。それが大事だと思うのです。

前方から来るものに対してちよつとたじろぐけれど、おびえずにくさくさとやる。それでいいのだと思つてやる。こうして現場に出れば、いろいろな子どもや大人と出会います。一日現場で過ごせばそこに記録ができます。

F 記録はどうしているのですか？

M 書くときがぐしゃぐしゃになってほかの人に読めないものになってしまいます。書こうとしている内容は自分にはわかつているのですが。大変矛盾することだが、このように考えていいのかた

めらう気持ちがある。しかし保育の実際は思ったことをやってみて、訂正しながら先に進むことでしょう。

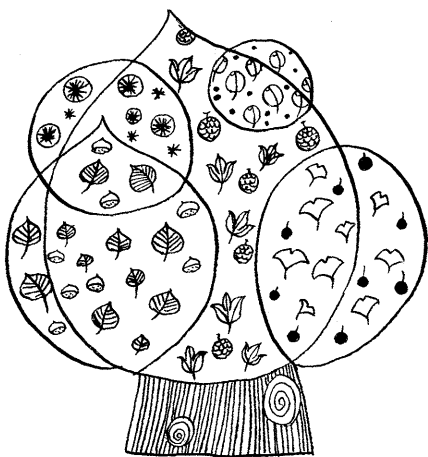
### 昨日の話と記録

たとえば、金の紐と銀の紐とを子どもがほどこしたとき、私はそんなにきれいに巻いてある紐を出してしまつていいのか迷いながら見ていました。結果とすると全部ほどいて、ぐしゃぐしゃになった紐の山の上に座つてその子が「孫悟空」と言つた。そこまで付き合つてみて、これでよかったと私は自分で納得しました。

F その子にも紐を出すことに迷いがあつたのではないでしようか。

M そうね（ほほ笑む）

F あなたは、子どもに癒してもらつていたので



すね。

M こういうことでは以前と同じようですが病氣前と後とは比べてみると、そこでたじろがずにやるということでは、自分が前進しているのを感じます。

F 昨日、愛育から帰って、服も着替えずに私に金と銀の紐の話をして子どもが「孫悟空」と言っ

たこと、王様のように見えたことを話しました。

一時間以上も話し、その後、ノートにミミズのはったような字で「笑い」「孫悟空」のことを書きましたね。それくらいその子どもが堂々としていたことが、心に響いたのですね。

M お母さんにもこの子が立ち去った後で話したところ、子どもが遊びの中で活気と自信をもったことを理解してくれました。母親とも共有することができました。

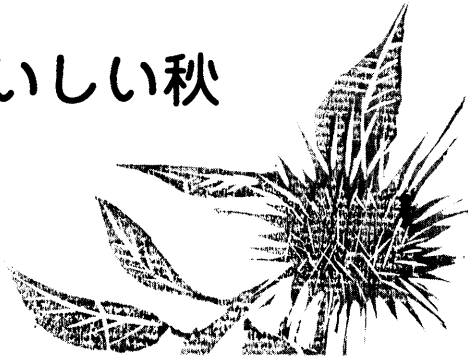
F あなたは愛育に行っても「何も役に立てないが」と言っていたけれど、自分自身にとっても、周囲の保育者や親にも何ができるかではなく、前向きに生きようという姿勢が伝わっているのでしょう。

M 新しい一日が本当にうれしい日でした。

（保育研究者）



## おいしい秋



文・カット  
田 内 英 理 子

**秋**、子どもたちが一番楽しみにしているのは何といっても**お芋掘り**です。土の中から大きなサツマイモ（以下お芋）や曲がったお芋が、それに虫も現れ出るのが、子どもたちはうれしく楽しく、歓声続きます。

私が東京の幼稚園で保育をしていたころ、初夏のころにバスを連ねてお芋畑に行つて、芋づるを植えたことがあります。農家の方が、「お芋を土のお布団に入れておくと芽が出るのだ」ということを話してくださるのを、子どもたちは目をまん丸くして聞き、ていねいに苗を植えました。ただだいて帰った芋づるは、保育室のベランダで大きな袋で育て、畑のお芋も大きくなったかなと思いをはせながら、楽しみにお芋掘りまで過ごしました。

今、私の家には庭がなく、プランターと鉢で花や野菜を育てます。次男の保育所の担任から、土に生ゴミを入れて一〜二か月おくと、微生物の力で生ゴ

ミが分解されて栄養のある土ができると聞いて、土作りもしています。微生物が生ゴミを分解するとき、熱を発するので、土はじんわり温まります。「土のお布団」ってこういうことだったのかと、実に、二十年近くたって体験し、なるほどなあ、不思議だなあと、この世の美しい仕組みに改めて感動しています。あのときは苗を植えたけど、私の心には「土のお布団」という言葉で命の営みを考える種がまかれたのでしょうか。この暮らしの中で、子どもたちの心にはどんな種がまかれているのだろう、いつしか芽を出すのはどんな種なのだろうと、楽しみにしていたのです。

ともあれ、お芋掘りも楽しければ、その後食べるのもみんなの楽しみです。子どもたちは、大きな立派なのはもちろん、どんな小さなお芋もおもしろがって持ち帰ります。お店に行けば、形も大きさもそろったものばかりですが、畑直送のお芋たちは、大

きさも色も味もとりにどりで。どれも誰が何か月も世話をした掘りあげたものかわかるので、ありがたくおいしく楽しんでもらえるように心を配ります。

小さすぎるものも甘みが薄いものもおいしく食べるために、知恵を絞って作るのが私の腕の見せどころ。お芋とアワの炊き込みご飯、お芋パン、コンブと煮たり、またレモン煮に、ふかし芋やいきなり団子、芋ようかんにクラッカー、てんぶらに大学芋にと、お芋料理は尽きず、不思議と飽きずに食べ続けます。

一年に一回、旬の季節にどっさり取れるものは保存食にできるものがあり、先人の知恵に感謝です。お芋の保存食といえば、わが家では干し芋です。壺岐ではお正月という和白いもちだけでなく、かんころもちも作ります。かんころとは干し芋のことです。薄く切った芋を水にさらしてからゆでて干すのですが、歯がたたないほど硬くなるまで、カチ

ンコチンに干しあげます。水分がほとんどないので傷まず、まさに保存食というものです。このカチンコチンをもち米と二緒に蒸して、かんころ一升ます山盛り二杯に、上手に丸められなかったもちを五、六個、好みでおろししょうがと砂糖を入れてつきあげると、かんころもちができます。

「かんころもちっておいしいなあ、大好き！」なのですが、私にとっては二、三日干したくらいの少しやわらかめの干し芋です。私は関東育ちなので、茨城産の干し芋をよく食べました。家ではストープであぶって食べ、自転車ツーリングでは携帯食にし、私の干し芋好きを知った友人がキャンプにも持参してくれてわいわい食べたりしました。干し芋を食べるときには、あのとときそのときの家族や友人の顔が浮かびます。それで、私はやわらかい干し芋を作らずにはいられないのだと思います。大きなお芋を丸ごと蒸して、冷めてから薄切りにして干します。

おひさまと風の具合にもよりますが、二、三日干すと食べごろ。ただし、水分が多いので傷みやすく、長く保存するには向きません。子どもたちも大好きでやわらか干し芋を数日楽しんだら、残りは硬く干しあげます。硬いものは、口に入れておくとゆっくり楽しめるので、子どもたちは「あめにする」と言ってお食べたり、お芋のない季節に小豆と煮たりします。

空気がカラリと乾いて北から風が吹くようになるこの季節は、干し物によい季節です。お芋のほかにも、カキやリンゴ、ダイコンにシイタケ、魚の干物やスルメもおいしくできます。おひさまと風を追いかけて、あっちへやったりこっちへやったり。空模様を見て家に入れたり、カラスやネコに取られないように知恵比べをしたり。干し物をする、忙しいこと。天の命の営みと先人の知恵、作る人取る人感謝しながら、実りの秋を味わいます。

（元幼稚園教諭 長崎県在住 二児の母）



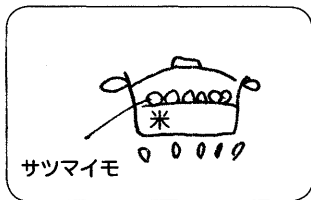


## 秋のお芋レシピ

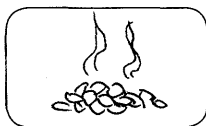


### ご飯に炊き込む

お米2合にサツマイモ中1本  
塩をばらりと振って炊きあげる。  
うちではもちアワも少し入れて  
より黄色くもちもちと炊くことも。  
炊飯器でもOK。  
中火にかけてふつふつしてきたら  
火を弱めて6～8分。蒸らし10分。  
電気よりガスの火で炊くほうが好き。



### 焼き芋



何といっても落ち葉たきで焼くのが最高！  
でも毎日はやってられないので、  
厚手鍋で焼いている。  
細めの芋はもっぱら焼き芋に。  
焼くと甘みが増すので甘みの薄い芋を焼く。

### 夫の祖母譲りの厚手鍋

真ん中がシフォン型のように  
なっている。昔はこれでカステラも  
焼いたそう。当時としてはハイカラ。

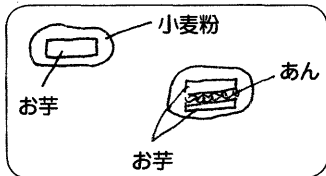


### ふかし芋

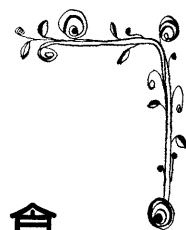
蒸すときは、圧力鍋でどっさり蒸す。  
まずは蒸したて、あつあつを！  
塩をばらりと振ると、甘みが引き立って  
おいしい。掘りたてのお芋は  
ほくほくで、のどがつまりそう。



### いきなり団子 (九州のおやつ)



小麦粉と少しの塩に水を加え、  
こねてねかせておく。  
(耳たぶの硬さになるまで、30分以上)  
この生地で、輪切りのお芋をくるみ、  
20分ほど蒸す。(カボチャでもよい)  
駅売りのものには、あんも入っている。



## 食 事

長 田 瑞 恵

### 母と子の最初のやりとり

赤ちゃんが生まれて初めて口にする食べ物、乳（母乳・人工乳）です。産院の方針にもよりますが、最近では出産後すぐに母乳を赤ちゃんに与えることができる産院も増えてきたようです。私の場合も、出産後の処置が終わってすぐに娘を抱かせてもらい、母乳を与えることができました。胎盤が体外に出されるとすぐに母乳が出るようになることは知っていましたが、それが自分の体に起こっているというのはとても奇妙な感覚でした。「自分はやは

り動物だったのだ」と妙に実感しました。

母と子のやりとりは、この授乳から始まると言われています。人間の赤ちゃんは母乳を一気には飲みません。少し飲むでは少し休むということを繰り返します。そして、赤ちゃんが休んでいる間に母親がほんの少しだけ赤ちゃんを揺すったりつついたりすること、赤ちゃんは再び乳を飲み始めます。この「子が飲む」↓「子が飲むのをやめる」↓「母が揺する」↓「母が揺するのをやめる」↓「子が飲む」↓……というやりとりが、まるで会話のように続くのです。

出産後、助産師さんから手渡された小さくて赤く  
てしわくちやの娘は、必死に私の胸にすがりついて  
きました。私はまだ、どのようにして乳を与えてよ  
いのかがよくわからず、娘を落とさないようにおそ  
るおそる抱きかかえていました。娘もまた、まだあ  
まりうまく乳を飲むことができないようでした。そ  
れでも、何とかほんのわずかだけ母乳を与えること  
ができました。その様子は、まだまだスムーズな会  
話とはいきませんでした。独立した存在となった  
私たち母子の間に、ぎこちないながらも初めてのや  
りとりが生まれた瞬間でした。

### 与えるもの、与えられるもの

幸いにして娘は、生後間もないころから懸命に乳  
房に吸い付いてくれましたし、私も十分に母乳が出  
ました。そのため、娘が保育園に通い始めるまでの  
間は、ほとんど完全に母乳のみで乗り切ることがで

きました。

慣れないうちは抱き方が悪かったのか授乳の途中  
で娘がむずかりだすこともありました。母乳が足り  
ているのか不安に思うこともありました。しかし、  
やがてすんなりと授乳ができるようになり、どのく  
らい飲んだら娘が満足するのかもわかるようになって  
いきました。

授乳にも慣れてきて、娘の体重が順調に増加する  
毎日が続いたころ、すくすくと大きくなっていく娘  
を見ながらとても不思議な思いに駆られたことがあ  
ります。それは「娘の体を作っているものは、すべ  
て母親の私から摂られたものののだ」という思いで  
す。もちろん娘の遺伝子の半分は父親からのもので  
す。しかし、それ以外のもの、体を胎内で形作るの  
に必要な栄養は、すべて母親から与えられたもの  
です。そして生まれてからしばらくの間は、成長  
に必要なあらゆるものを娘は私から吸収して成長

を続けているのです。そう思うと、不思議でたまらないのと同時に、母親としての責任の重さを改めて感じました。

授乳の時間は、私にとっても心の安まる時間でした。無心に乳を飲む娘を見ていると、母親としての実感が沸いてくると同時に、分娩によって私とは別個の存在となった娘との一体感を取り戻すことができました。そして何よりも、自分が娘に必要とされている喜びを感じることができました。それはとても満たされた感覚でした。

授乳をはじめとして、母親が赤ちゃんに触れることによって赤ちゃんの発達が促進されることは広く知られています。その一方で、母親の方も、スキップを通じて癒されていることがわかってきました<sup>2</sup>。母親が赤ちゃんに触れている間は、赤ちゃんだけでなく、母親の方もとてもリラックスしているのです。子育ては大人が一方的に子どもに与える関係

ではなく、子どもからも大人へたくさんのもので与えられる互恵的な関係だと言えます。

## 離乳食

娘の誕生前から半ば楽しみに、そして半ば戦々恐々としていたことの一つに、離乳食作りがありました。料理は好きなので、離乳食作りはさほど苦ではないだろうとは思いました。しかし、「仕事の合間に大人の食事とは別に離乳食を作る時間があるのだろうか」、「娘が食べてくれるだろうか」、「アレルギーが出たらどうしようか」などと考えると、少し気が重かったのも事実です。

そもそも、私には子どもの発達についての学問的な知識はあるものの、離乳食作りのような子育ての即戦力となる知識があまりありませんでした。せいぜい、職場の学生たちから調理実習で作った離乳食の話の聞いたり、研究協力園の食事の時間をのぞい

てみたりする程度でした。

そこでもろもろの不安を解消するために、私は娘の誕生前から準備を始めることにしました。離乳食作りに必要だとされる調理器具（といっても、すりばちとミルサー程度）をそろえてみたり、宅配手に入れることができる離乳食用の食材を調べてみたりしました。

子育ての先輩でもある実母に、離乳食作りのコツを尋ねてみたのもそのころです。しかし母の回答は意外なものでした。

「あなたが赤ちゃんのころに、特別に離乳食を作った覚えがない」



確かに、赤ちゃんのためだけに別に離乳食を作らなくても、親の食事から赤ちゃんが食べられそうなものを取り分けて薄味にしたりすりつぶしたりすれば、赤ちゃんに与えることができます。母の答えには少々拍子抜けしましたが、その分、気が楽になりました。そして、まずは無理せずできる範囲でやってみようと思うようになりました。

アレルギーの可能性を考え、離乳食は心持ちゆっくり進めました。最初のころは、お湯を加えてどろどろにすりつぶした白米やリンゴの果汁などを、様子を見ながら与えていきました。

娘は最初、初めて口にする食べ物の味にきょとんとしていましたが、すぐに「これはおいしい」と思ったのでしょうか、もくもくと口を動かして上手に飲み込むようになりました。赤ちゃんは乳を飲むことも誰にも教えられずにすぐに上手になります。が、食べることもこんなに簡単にできるようになる

のだと驚嘆しました。娘は与えられたものを何でもよく食べました。私は離乳食の準備が楽しくなり、娘の口にせつせと食べ物を運びました。こうして、娘の離乳食は順調に進み、娘が誕生する前の私の心配は杞憂に終わったのでした。

## 悩みの種

ところが、離乳食が完了して幼児食になった二歳二か月の現在、娘の食事は、大げさに言えば、現在の私の子育ての中で唯一にして最大の悩みの種とも言えるようなものになっています。

娘は全体的には食欲旺盛です。特に保育園では、本当に気持ちがいくらいいの食べっぷりのようです。連絡帳には「今日は〇〇が気に入ったようで、お友達の方までもらって食べました」というような、親としては少し恥ずかしくなってしまうようなことがしばしば書いてあります。

ところが、家での食事となると様子が変わります。やはり基本的にはよく食べるのですが、食べる量が一定せず、食べたがるものにもかなり偏りがあります。最も頭が痛いのは、好んで食べるものがころころと変わることです。ある時期はインゲンが好きで、ほとんどインゲンだけでおなかを満たしていたことがありましたが、ある日突然食べなくなり、今では見向きもしません。ウインナーが大好きになり、親の方まで取って食べていた時期もありましたが、すぐに飽きてしまいました。今はキュウリとゆで卵がお気に入りですが、このブームもすぐに終わりそうです。

保育園でバランスよくたくさん食べてくれるので、家庭での食事にそんなに神経質になる必要もないのかもしれません。しかし、やはり親心としては、「たくさんおいしく食べてもらいたい」、「できるだけまんべんなく栄養を摂ってほしい」という願いが

あるのです。

もちろん、食べさせようと親が必死になってもあまり効果はありません。それどころか、食べさせようとするとあまり、食事の時間がつまらなくなってしまうてはかえって逆効果です。それはよくわかつているのですが、毎日「これなら食べるだろうか」と工夫して用意した食事を娘が食べようとしないと、がっかりしてしまうのです。しかし、私がかっかりした顔をしたり、無理に食べさせようとしたりすると、娘はますます食べようとしくくなります。時には、食事中に指を口にくわえてふてくされたようにそっくり返ってしまうこともあります。いったん口に入れた食べ物を口から出したり、床に放り出したるすることもあります。

このような振る舞いは、現在真つ只中の反抗期のためなのかもしれません。そう思えば、「しばらく様子をみてみよう」と多少は落ち着いた気持ちに戻

ります。これまでも、一時的に「困った」と頭を抱えたとしても、気がつけば「いつの間にか治まった」ということが大半でした。私がおおらかに見守っていくことが大切なのかもしれません。

娘の偏食がいつまで続くかはよくわかりませんが、しばらくの間は娘が楽しく食べられるよう、そしてできればバランスよく食べられるよう、私も楽しみながら工夫していきたいと思います。

（十文字学園女子大学 専門は認知発達。主な著書は『知識獲得過程についての理解の発達』

風間書房二〇〇三年）

註

1 Kaye, K. *Toward the origin of dialogue*. In H. K. Scafier (Ed.), *Studies on mother-infant interaction*. N. Y.: Academic Press, (1977).

2 小谷博子 (三) 親子の絆を深めるベビーマッサージ (市民公開講座 親と子の響きあい、第四十八回日本母性衛生学会総会、母性衛生、四十八 (三)、六十四頁、二〇〇七年

## 子どもと保育の情景 (23)

# 今できることは二つしかないんだ！

戸田雅美

その日は、朝から雨が降っていて、幼稚園の園舎は、保育室やテラス、玄関ホール、遊戯室と、子どもたちの遊びが広がっていた。お弁当の前に、五歳児はみんなで制作することになっていた。十一時近くには片づけをして、片づけを終えた子どもから、担任が出したテーブルに椅子を持ってきて座り始めた。テーブルは五、六人ずつ座れるようになっていて、このクラスでは、グループごとに座ることになっている。

ふと気がつくと、テーブルに一人で座っているかんじとひさとが、言い合っているのが見えた。かんじは、ここは自分たち「らいおんグループ」が座るのだ

から、ひさとたちはほかのテーブルに座ってほしいと言っている。これに対し、ひさとは、自分たち「きりんグループ」が座るテーブルはないので、かんじの方こそこのテーブルを空けてほしいと応じる。

見ると、ほかのテーブルには、もうグループごとに子どもが座っていて、どうやらひさとたち「きりんグループ」が座る場所はないらしい。ということは、らいおんグループはかんじを除いて、みんな別の所に座っているということになるのかしら……。私が考えながら見ていると、ひさとが「ほら、あそこに、らいおんグループの仲間が座っているでしょ。だからあっちに



座ってよ」とテーブルの一つを指さす。みゆうやさちもきりんグループの仲間らしく、ひさとの言うとおりだというようにとうなずいている。

「だって、ぼくが一番最初に来て、このテーブルに座っていたんだからね、ほかの人が、ここに来ないからいけないんだよ。だから、ぼくは、ここから動かない。」とかんじ。そうか、らいおんグループの仲間の子どもたちは、かんじが先に来てこのテーブルをらいおんグループと決めて座っていたのに気づかず、違うテーブルに座ってしまったのだと納得する。ひさとが指さしたテーブルには、もう、四人ほどの子どもが座って、楽しそうにおしゃべりをしている。かんじもまた、ほかの子どもの動きを気にすることまではせずに、ただ席を取っておいたことに満足して待っていたのだろう。みゆうは、「かんじ君、それならば、ちゃんと仲間を呼べばよかったんだよ」とつぶやく。

「じゃあ、かんじ君、あっちのらいおんグループの仲間の所に行つてさ、呼んできてよ。そうしたら、ぼく

たちが、あっちのテーブルに座るからさ」とひさとが考えながら提案する。「嫌だよ。だって、ぼくが最初にこのテーブル取っておいたんだから、みんなが来ないのが悪いんだよ」とかんじは動こうとしない。かんじとしては、自分が動いている間に、そこにきりんグループの子どもが座ってしまい、なし崩しになってしまうのではないかと恐れているのかもしれない。確かに、きりんグループの子どもたちは、すぐにも座りたそうな雰囲気である。あいにく、今らいおんグループのメンバーが座っているテーブルは、六つあるテーブルの一番遠くにあつて、かんじが席を離れていく以外に、話をできる状況ではない。こんなやりとりをしているうちに、きりんグループのメンバーは、かんじのテーブルに座り始めてしまった。ひさとは、「みんなが、こつちに来るんだったら、ちゃんと替わるからね。大丈夫だよ」と氣遣つて言う。

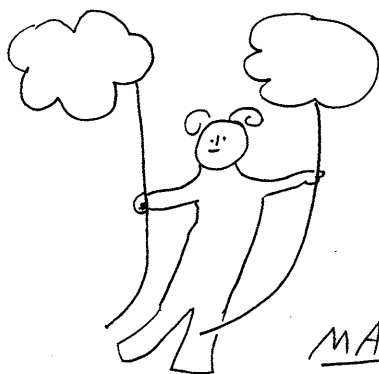
「でもさ、ぼくが一番に席を取っておいたんだから……」とかんじがなおも思い切れないでいると、ひさ

とは、「あのね。それはわかるけどさ。とにかく、今できることは二つしかないんだ！　かんじ君が、あっちにいくか。あっちの人たちがこっちに来るように言いにいくか。みんな来るんならぼくたち替わるからさ。わかる？　二つから選ぶしかないんだからね」と繰り返し繰り返し説く。かんじも、そのたびに「だって、ぼくがせっかく最初に来て席を取っておいたのに……」と言っていたが、ちょうどそれまで別の子どもに対応していた担任がやってきて「そうだねえ、ひさと君の言うとおりだね。とにかくみんなに相談してきただろう、ついに、仲間が座っている所へ行く。

らいおんグループのメンバーは、かんじが来たことに気がつくと、「待っていたよ」という様子で迎える。「ねえ、ぼく、今日は最初に来てあっちのテーブルで待っていたのに、どうして来ないの？」とかんじが聞くと、みんな驚いて、かんじの指さしたテーブルを見る。「そうだったの」「知らなかった」「呼んでく

ればよかったのに」「でも、あっちは、きりんグループの人が座っちゃっているよ。今日は、こっちにおいでよ」などと、口々に言う。

かんじは、みんなの言葉に耳を傾けていたが、しばらくすると案外あっさりと「わかった。今日はこっちにする！」と言う。グループの仲間も、「それがいいよ」というように、みんなにこにことしている。私は、これまで自分が決めたテーブルにこだわっていたかんじのことだから、きつと自分の主張を通そうとするのではないかと予想していたので、少し驚いた。どうやら、担任も同じ思いだったらしく、「かんじ君、



MAORI

本当にいいの？」と聞く。かんじは大きくうなずく。

「そうか、じゃあ、きりんグループの人にそう言ってくるといいね。ひさと君たち、さつきから、どうなったかなって気にしているからね」と担任。かんじは、早速、「今日はあっちが、らいおんグループになったからね」と伝えに行った。担任は、「今ちょっと、らいおんグループさんの中で、かんじ君が先に座って待っていたほうのテーブルに移るか、今らいおんグループの人たちが座っている方にかんじ君が移るかって、相談していたんだけど、かんじ君がこっちに来ることにしたんですって。ちゃんと話せてよかった……」と、少し待つことになってしまったクラスの子どもたちに話し、制作の活動に移っていった。

「かんじは五歳児にもなつてつまらないことにこだわっている」と考える立場もあるだろう。「保育者も制作という予定されている活動があるのに、このようなささいなことに時間をかけるのはよくない」という

考えもあるだろう。こうした立場から見れば、テーブルも決めておくほうがよい、小学校へ行けば、座席も決まり、時間もチャイムに従って授業を受けることになるのだからと言うのかもしれない。

しかし、かんじの思いを理解し、精一杯考えて「今できることは二つしかないんだ！」と言うひさと。ひさとの説得を受けて、自分でもその二つだろうと考え、さらにグループの友達の様子から「今日は自分が動こう。そのほうがみんなにとって良さそうだ」と自ら判断したかんじ。その決断をうれしく受けとめるグループやクラスの仲間。

ささいなことに思えるが、ここにあるのは、人間として生きていくうえで、一生続く営みである。「人と人が一緒に生きていくために必要なことは、単純な決まりや、安易な協調性ではない」、そんなことに思いあたる出来事だった。

(東京家政大学 家政学部 教授 児童学科 保育専攻)

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (23)〉

## 多様な機能をもつ幼少年期教育・保育施設

— フランクフルト市における

陶治<sup>とうや</sup>ネットワークの活用実態 (1) —

大戸美也子

幼稚園と保育所の機能の一体化を目指す施設が動きだす一方で、幼保小の教育の連続性が強調されています。複数の機能をもつ、異年齢の子どもたちの生活と学習をどのような一貫した考えで進めていくかが、今問われているといえます。この新しいタイプの幼少年期の施設と教育を考えると、非常に示唆されたのがちょうど三年前の平成十七 (二〇〇五)

年十二月に広島と東京で開催された、「幼児のケアと教育の統合を求めて—フランクフルト市の挑戦」と題する講演会でした。この講演会は、「就学前の教育・保育を一体として捉えた一貫した総合施設モデル事業」(平成十七年四月開始)が着手され、翌年十月から認定子ども園に引き継がれる時期に、海外での幼保一体化の取り組みについて学ぶために日本保

育学会の課題研究委員会と国際交流委員会とが共同企画<sup>1)</sup>して開催され、講師にフランクフルト市学務局就学前教育担当官のシュボーケット女史が招かれました。

彼女の講演は、大きく二つの内容からなっていました。一つ目は、ドイツでは幼稚園と保育所に学童保育をも加えた幼少年期の教育・保育施設 Kindertagesstätte (以下 KITA) という総合施設が立ち上げられ、この新施設は「子どもの保護 (Betreuung) と陶冶 (Bildung) と教育 (Erziehung)」の三つの機能をもって展開していること。二つ目には、フランクフルト市学務局が音頭を取って進めている「陶冶ネットワーク」というユニークなプログラムの具体的な紹介でした。

あまり耳慣れない Bildung という言葉に戸惑いつつも、この言葉が「子どもが外界のさまざまなものと取り組み、内的な世界をつくり上げる、そのため

の主要な活動」を表していることを知り、目の覚める思いがしました。子どもの自己形成のプロセスをとらえる視点は、わが国の幼保一体化論にも、幼小の接続論にも必ずしも明確にされないできた概念だったからです。

シュボーケット女史の話は、「子どもの自己形成のプロセスを誘発し、援助する刺激的な環境、教育的で文化的な教材を提供する」ための「陶冶ネットワーク」や「陶冶工房」など、これまでに見たことも聞いたこともないような取り組みに及び、私は、ビックリしながらも一度現場を訪れ具体的な展開をつぶさに見学して理解を深めたいとの願いを強めました。

そして、本年三月、ようやく念願になってフランクフルト市の六つの代表的な「陶冶ネットワーク」と「陶冶工房」を訪れ、その実態を知ることができました。見学先はすべて、シュボーケット女史が

選び、自らその案内を務めてくださいました。また、この旅行に、お茶の水女子大学の浜口順子先生と尚綱女学院大学の佐藤陽子先生が同行し、浜口先生の姉上である濱口・クレナー牧子教授（ボフム大学）が通訳に当たってくださいったことは、Bildungという言葉の理解を深める上で、また現場での子どもたちのつぶやきを知る上で、大いに助けられありがとうございました。

見学先の紹介の前に、フランクフルト市の「陶冶ネットワーク」誕生の背景について簡単にふれておきましょう。

### 陶冶ネットワークの概要

フランクフルト市は、人口六十五万人のドイツ第五位の、また外国人市民の割合の高い都市です。市内には、百三十一の公立保育施設と三百の民間保育施設があり、KITAタイプの施設では、七十〜八十

%をいわゆる移民の子どもたちが占めており、しかも出身国は、一施設で十五〜三十か国にも及んでいます。従って、現代ドイツの保育者は実に多様な価値観や伝統、生活習慣の異なる子どもたちを相手に、彼らの好奇心や探究の意欲を育むという大仕事に取り組んでいるといえます。

フランクフルト市では、一九九九年以来、学務局が仲立ちとなつて市の各種博物館、メディア、音楽芸術関連の施設、スポーツや運動関連の施設などの協力を得て、各施設の文化財を活用して、子どもたちがさまざまな感覚を使って彼らの好奇心や知的欲求を満足させる教材開発を進めてきました。現在、九つの領域にわたる三十五もの施設とネットワークをつくり、保育者は各施設の専門家や学芸員の助けを借りて三〜六歳までの子どもにふさわしい学びの方法を身に付けるよう、言い換えれば、専門的知識と子どもとの「つなぎ役」の育成も行なわれてい

ます。

研修期間は四日間と短いです。研修後には専門保育者の資格が与えられます。専門保育者の育成で強調されていることは、情報や知識の伝達だけではなく、「空間的、身体的・運動感覚的知性や人間関係の知性の促進と援助」(シュボーケット、百九十二頁、二〇〇七年)です。専門保育者の資格をもつ保育者は、市のいろいろな保育施設の子どもたちのために年間五〜六回は現場指導に当たるほかに、他の保育者のために手引書を作る義務をもっているということです。

また、「陶冶ネットワーク」にかかわる多くの施設に陶冶工房Ⅱワークショップの部屋が設けられていて、子どもたちが体験したことを自ら確かめたり、アイデアを新たに加えたりする自己活動の機会も用意されています。単なる体験学習に留めずに、子どもたちの興味や好奇心が心に刻まれ長く持続

するような配慮があるところに、フランクフルト市の「陶冶ネットワーク」の特色が見られます。このような研修の試みは、ドイツ最大の恐竜の化石をもつ自然史博物館、ゼッケンベルク博物館で始まったということです。私たちの「陶冶ネットワーク」と「陶冶工房」の訪問の旅もこの博物館からスタートしました。

## 陶冶ネットワークの実際(その一)

一、ゼッケンベルク自然史博物館での  
恐竜の化石をめぐる  
五歳児のフィールドワークと  
陶冶工房の活動

ゼッケンベルク自然史博物館は、一八八三年フランクフルト市の三十二名の市民によって結成された自然研究協会を母体に、市民の自然への関心を高め



▲写真1：展示室での活動

る社会教育の場として開設されました。開設にあたり植物や医学などの自然科学に関する知識を市民に広めるために、一七六〇年代から私財を投じ募金

活動を進めてきた医師であり自然科学者のヨハン・ゼッケンベルク博士の名前が付けられ、百年にわたり市民の科学教育の啓蒙のために諸活動を展開してきました。しかし、幼児向けのプログラムが開発されたのは一九九九年のことで、同博物館学芸部長のヴァインター博士の協力のもと、三〜六歳までの子どもたちの小グループを対象に保育者が博物館案内をする最初の試みが行われました。最初は、資格をもつ保育者が、自分のクラスの子どもたちを対象に学芸員に付き添われて行われたということです。

フィールドワークの当日、子どもたちはまず裏口からワークショップの部屋に直行して、その日の簡単な活動予定を聞いてから、展示室へ移動します。展示室の中央に展示してあるひととき大きな恐竜の化石の足元に車座に座り、その日の活動が始まります（写真1）。



この日は、五歳児が七名と若い専門保育者と担任の保育者、それに将来この領域の専門保育者を目指す保育者も参加していました。一般の入場者は、子どもたちの横で化石を見上げています。

専門保育者「みんな、化石を見てどんなこと感じ

ますか？」

子どもたち「大きい」「骨ばっかり」「尻尾が長い」

専門保育者「生きていたときには、肉も皮膚も付いていたの。ほらー」

と言って、ミニチュアの化石の原型を示す。

専門保育者「ほかに、気づいたことない？」

子どもたち「歯が大きい」「とがっている」

専門保育者は、三十センチメートル大の黒い鋸やじりのようなものを取り出して見せます。「これ、何だと思う？ これは恐竜の歯なの……」「歯は白いの

に、どうして黒いの？」「長いこと、土の中に入っていたから、土の色が付いてしまったの」という会話をひとしきり済ませると、歯の大きさを知るために



▲写真2：ワークショップでの活動

菌を子ども一人ひとりのひじにあてながら大きさを確かめていきます。展示室で恐竜の化石の現物を見ながら、子どもは自分の気づいたことを自由に語り、専門保育者は子どもにも応えつつ、新たな教材を提示して気づきの世界を広げていきます。展示室の活動を終えると、再びワークショップの部屋に戻り、子どもたちは今見てきた恐竜の化石について本で確かめたり、鋭い菌の絵を描くなど、体験を心に刻む活動に入るのでした（写真2）。

## 二、KITA9におけるメディア活動

フランクフルト市の中心から西へ車で三十分ほどのところにあるKITA9は、外国人市民の多い地域にあり、二十六か国の出身国をもつ百四十一人の三十二歳までの子どもたちが生活しています。

フランクフルト市の場合、KITAを利用する子どもたちの保護者の八十％が移民で、その多くは低



▲写真3：施設長のベッカー先生と副施設長のカイザー先生

所得階層にあるということです。保護者の出身国が二十六か国ということは、二十六の言語と価値観と生活習慣に対峙することであって、その運営は並大

抵ではありません。しかし、多文化教育の専門教育

を受け教育歴も豊かな施設長のベッカー先生と最近までシュポークェット女史のもとで市の学務を担当してきた副施設長のカイザー先生（写真3）とは、

「ドイツ語が共通文化を生みだす言語の役割をもつ」という信念をもって学務課の支援と「陶冶ネットワーク」をフルに活用して多様な学習の機会を用意しています。また、コンピュータを多様な言語コミュニケーションのツールとして活用していく方針で、将来的には市監修の教育ソフトの開発も進めていくそうです。

証券会社を改造して作られた施設には、各種の機能をもつ多数の部屋が用意されていました。学童保育向けの歌とダンスを楽しむ「ディスコ・ルーム」や子どもたちが私物を持ち込んで一週間ほど「マイルーム」として使つてよい部屋など、複雑な運営の中で生活学習の場も用意されていて、先生方の

努力には頭の下がる思いでした。

（お茶の水女子大学 チャイルド・ケア・

アンド・エデュケーション講座）

註

1.

シュポークェット女史の講演内容は、日本保育学会編「保育学研究」第四十四巻第二号、二〇〇六年、鳥光美緒子訳で収録されている。

2.

Bildungは、鳥光訳に準じて「陶冶」という訳語を使った。Erziehung（教育）という言葉と使い分けて使用しているので、わが国の幼児教育・保育界では全くなじまない言葉であるが、あえて使用した。ドイツにおいても、さまざまの意味でこの言葉が使われているとのことである。陶冶は、子どもが五感を通してつかんだものを主体的に確認することで持続的に記憶に留め「自分をプログラムする」作用のことであり、いわゆる教師の一方的介入による知的教育とは次元が異なるものと理解している。

## 保育の現場から

# 支えてくれている人の存在

渡邊満美

気づかずに支えられている

幼稚園の養護教諭として数年。ほかの幼稚園で養護教諭をしているという方には、なかなか出会えませんが。幼稚園の養護教諭としてどうしていったらよいかなど悩むこともたくさんあるのです。なぜ増えないのだろうか、近くにいたら相談できるのに……と思うこともあります。と同時に、近くで私をいつも支えてくれている人たちの存在に気づくのです。

ハートのおてがみ

けがの子どもの対応をしていると、年中児のY子が保健室に入ってきた。Y子が保健室に来るのは久しぶりだなあと思いながらも、今までの様子とは何かが違うという気がしていた。そう、いつものY子なら、顔を見るなり何か話し始めたり、近くに来て私の動きを見たりする。しかし、今日はY子の声や顔が、私の視界に入らなかった。なんだか変と思いながら、見回す

と私の左斜め後ろにいた。

W 「あら（ここにいたのね）」

Y 子「Yちゃんね、ハートをつくったの」

W 「すてきね」

そんなやりとりをし、後ろのY子を感じながら、そのままほかの子どもたちと過ごしていました。ちょっとすると、後ろで違う気配を感じたので振り向くと、

Y 子「おてがみを、かこうとおもうのね」

W 「誰にかくの」

Y 子「Hせんせいにかきたいの」

W 「それは、すてきね」

そして、小さな声で

Y 子「Yちゃん、じがかけないの」

作ったハートを見せてくれました。ハートは赤いクレヨンで塗られていて、裏には絵が描いてありました。これでも充分よいのではと思っていました。字が

書けなくても、文字にしなくても、伝わるものはあり、受けとめてもらえるはずよ、と思っていました。そんな思いと同時に、Y子の伝えたい思いは別のところにあるのかもしれない……

W 「先生が（字を）書いてもいいの？」

と聞き返していました。首を縦に振るY子がいました。書き始めようとしたとき、一部始終を見ていた、年長児のK子とA子。

K 子「えー、じ、かけないの」

W 「まだ、小さい組だもの」

K 子「K子はかけたよ」

A 子「A子も」

W 「そうかあ」

普段なら「字が書けなくてもいいじゃない」など、焦らないで大丈夫というメッセージを伝えていたと思うのです。しかし、私が代わりに書くことと決めたこと、

そして何よりY子の伝えたいという気持ちを、そんなやりとりを挟むことで中断したくなかったのです。二人のことはかまわずに、書くことにしました。

Y子「せんせい、こしょこしょばなしでもいいの？」

W「かまわないわよ」

Y子も、近くにいたK子とA子のことが気になったのでしよう。そんなやりとりに、何か言うかもしれない二人を見ました。しかし、何も言いません。何も言わない二人と目を合わせ、もう一度私もうなずきました。

Y子の声は、小さく最初は聞きとれませんでした。

Y子「Yちゃんは一人であそんでいます」

私たちの密やかなやりとりに何もいわない二人、書いてある文字を読み始めました。冷やかしのような感じを受けなかった私は、Y子の表情も見ながら書き進めていきました。

Y子「いっしょにあそぼうね」

Y子「SちゃんがいるときはSちゃんとあそびます」

そうか、今日Sちゃんは休みだった、とそこで気づきました。

Y子「Sちゃんがいなかったきはせんせいとあそびます」

ずっと見ていたK子とA子は、やっと一息ついたやうでした。というより私がやっと一息ついた気持ちでした。書いてある文字を読んでいた二人の声はいつの間にか聞こえなくなっていたように感じました。しかし本当のところ、私の気持ちが二人に向かなかったために聞こえなかったのか、声を出さずに読んでいたのかはわからなくなっていました。ただ、私はどこかで、K子とA子は、読んだ言葉をかみしめていたのではないかと思っていました。一息つきながら、私は二人がここにいる意味を考えていました。この二人が、こんな思いを抱え過ごしている人がいることを感じ過ぐす時間……。自分の弱い部分を人に出してもいいことを知り、その弱さを受けとめてもらいたいと伝えようとしている真剣な姿に出会えたことはよかった、と私は思っていました。

その二人が、

K子・A子「きつと絵をかいたらいいよ」

Y子は迷わず「うん」と答えていました。

二人は、Y子の気持ちを一緒に感じていた、私はそう思わずにはいられませんでした。そしてY子は、この二人から絵を描いた方がいいと言われたこと、うれしいことだったのでは……と考えていました。Y子の「じがかけないの」に対して、返事のような「え」



じ、かけないの」という言葉。その言葉を言ったK子とA子が、絵を描いたらいいたいと言うようになるなんて……私は「うんうん」と、うなずいていました。

もしかすると、K子とA子の「きつと絵をかいたらいいよ」は、空いているところには絵！と、単純な一言かもしれません。しかし、Y子の気持ちも入れた方がいいよ、という意味の言葉だと思ふと、とても優しい言葉に聞こえてきました。もし、途中で二人がその場を離れていたなら、この言葉を聞くことはできませんでした。

ハート型の裏は赤くクレヨンで塗られていたため、下敷きになる紙にハート型の紙を載せ、鉛筆で書いていました。空いている空間にも鉛筆で絵を描き、Y子はもう一度書いたものをしっかり見るために、ハートを持ち上げたとき、そこには文字と絵が映し出されていました。それを見た瞬間、四人一緒に「わ」と声を上げ、気持ちが重なり合ったような瞬間でした。ちよつと明るい気持ちになりました。

A子「ハートとか星とかもいいんじゃない」

Y子は、まだ空いているところに何を書こうか考え、

Y子「先生、ブタでもいいかなあ」

やっぱりハートや星は描かないのか……と思いつつ、

W「うん、喜ぶと思うわよ」

Y子はブタと、ていねいにハートと星も描きました。

そしてハート型のカードを、作った封筒に入れました。

W「Yちゃん、もっていきける？」

私は思わず聞いてしまっていました。Y子は「う

ん」と元氣よく答えました。何だか安心する答えでし

た。さみしさを感じたりすることがこれからもあるか

もしれない。でも、受けとめてほしい気持ちを表し、

すでに自分の気持ちに向き合うことをしていたY子。

大丈夫と思えた一つの出来事でした。

かわりから生まれる

私はなぜ大丈夫と思えたのだろうか……。

Y子が気持ちを表現できたこと、すでに自分の気持

ちに向き合っていたこと、幾つかのことが重なり合っ  
て大丈夫と思えたのだと思います。しかし、何より人  
を頼りにするという、信頼感をもっているように思え  
たことがそう思わせてくれたのかもしれない。

Y子は、S子が休みで、なんだか寂しく……。そん  
なとき、担任の先生を頼りに、支えにしていました。

その寂しい思いを先生に伝えたいとY子は思っていま

した。そして、偶然出会ったK子・A子は手紙の思い

が届きますように……と支えていました。私は三人そ

れぞれが支えること、支えられることの心地よさを感じ

ることができるようにかかりました。生活の中で

は、支えてくれる誰かも、そして、その間をつないだ

り、支えたりしている誰かもあると思うのです。

養護教諭はそんな、間をつないだり、支えたりして

いる役割もあるのだらうと思いました。

人は、人によって傷つけられる。

しかし、人によって癒される。



養護教諭仲間とそんな話をしたことがありました。

人は傷つけられたと感じるとき、悲しかったり、怒りだったり、寂しくなったりと複雑な気持ちになる気がします。傷ついて、自分ではどうしたらよいかわからなくなり、時にはこの気持ちから逃げ出してしまいたくもなりません。けれど、逃げずに自分の気持ちと向き合い、乗り越えようと思うとき、または乗り越えるとき、そこには、その気持ちを支えてくれている人が誰にでもいると思うのです。ただ、誰にでもいる誰かは、いつもすぐ近くにはいなくて、今までのかわりの中にいることがあるのではないかと思うのです。

何気ない日常、一人ひとり違う私たちが一緒に過ごしていれば、傷つけられたと感じることも、癒されたと感じることも一人ひとり違うこと。だから、私たちはわからないうちに傷つけてしまうこともある。そして、わからないうちにたくさん助けていたり、支えていたりしていることもあると思うのです。ただ、人が、相手を思う優しい気持ちは、どんなときも本当の

意味での支えになると思うのです。

大人になり、その生き方・考え方が素敵だなあと思う人に出会ったとき、「子ども時代を豊かに育った人は、また豊かな人だと思う」と、私を支えてくれる人が教えてくれました。私も本当にそう感じるのです。

「豊か」の中には、楽しさだけではなく、辛く悲しいことも含まれているのでしょう。その辛く悲しいことから逃げずに乗り越えてきたことなどすべてが、豊かなものとなっていくのだと思うのです。そして、その豊かさの中には、人とのかわりは欠かせないと思うのです。

今、出会っている子どもたちは豊かな時間をつくりあげているとき。その豊かな時間のほんのひとときを一緒に過ごす。子どもたちの大切な時間であることを忘れずにいたいと思うのです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

## 編集後記

「子どもと音」を特集した。歌や踊り、言葉遊びなどを通して音やリズムや音楽と親しみ、共鳴し、それに合わせて子ども同士も共に揺れる。L.クラークスのリズム論にあるように、昼と夜、波の打ち寄せ、心拍などの自然の生み出すリズムは決して等間隔の機械的な反復ではない。人はそのようなリズムを生き物として根底に抱きながら、人間的な音を楽しむのだろう。

小さい子どもは、うれしかったり待ち遠しかったりするとき、やたらにピョンピョン跳びはねる。見ていてよくあんなに跳び続けられるなと感心するほどだ。大人からすると無駄なエネルギー消費に見え、まねをしたらすぐにくたびれてしまう。こういうことをしない人間を「音なし（おとな）」というのもっともだと思う。(H)

## 幼児の教育 第107巻 第11号

平成20年11月1日発行  
編集兼発行人 浜口順子  
編集部 永山 綾  
発行所 日本幼稚園協会  
〒112-8610  
東京都文京区大塚2-1-1  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発売所 株式会社 フレーベル館  
☎03-5395-6604 (編集)  
振替 00190-2-19640  
印刷所 図書印刷株式会社  
定価 550円 (本体524円)  
©日本幼稚園協会 2008 Printed in Japan

表紙絵 佐藤奈々  
扉カット 佐藤奈々  
扉題字 津守 眞  
カット 斎藤明子  
編集委員 伊集院理子  
上坂元絵里

ご購入のお問い合わせは、  
フレーベル館までお願いします。  
☎03-5395-6613 (営業)

## 次号予告

### 〈特集〉第61回日本保育学会から

根津明子・徳田克己・亀谷和史・井上知香

・縄を<sup>な</sup>う 町を<sup>な</sup>う 宮里和則



☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

## ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開始めました！

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション "TeaPot"  
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/> へアクセスしてご覧下さい。

明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。ご意見・ご感想などは、youjimail@yahoo.co.jpまでお寄せください。

# 幼児教育の基本書

平成20年改訂

## 幼稚園教育要領の基本と解説

無藤 隆 柴崎正行 秋田喜代美／編著

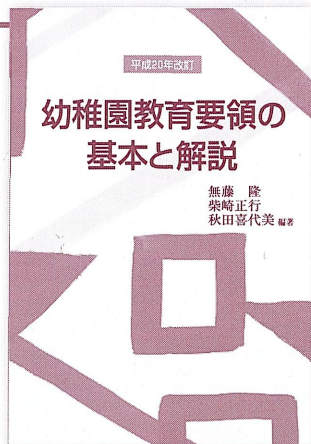
改訂部分をおさえながら、幼稚園教育要領に示された、幼稚園教育の変わらない理念を活かした保育について解説。

21×15cm 232頁 定価1,680円（税込）

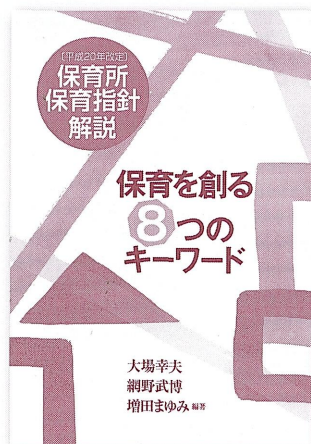
### ●主な内容

- 序 章 改訂に至る経緯と社会状況
- 第1章 幼稚園教育の基本—総則のポイント
- 第2章 幼稚園教育要領のねらい・内容—5領域のポイント
- 健康／人間関係／環境／言葉／表現
- 第3章 幼稚園教育の基本と改訂を踏まえた計画・実践のポイント
- 第4章 留意事項
- 小学校との連携／家庭との連携～子育ての支援／家庭との連携～
- 預かり保育／特別支援児の保育／心が動かされる体験

付 録  
幼稚園教育要領（新旧対照表）／教育基本法／学校教育法（抄）  
学校教育法施行規則（抄）



350-10



355-10

平成20年改定 保育所保育指針解説

## 保育を創る 8つのキーワード

大場幸夫 網野武博 増田まゆみ／編著

8つのキーワードから保育所保育指針をシンプルに読み解き、指針のねらいと可能性について解説。

### ●主な内容

- 序 章 新保育所保育指針の基本的考え方と8つのキーワード
- 第1章 保育所児童保育要録
- 第2章 養護と教育の一体性
- 第3章 子どもの最善の利益
- 第4章 発達過程
- 第5章 協働
- 第6章 創意工夫
- 第7章 生活の場
- 第8章 組織としての保育力

付 録  
保育所保育指針／保育所保育指針等の施行等について  
保育所保育指針の施行に際しての留意事項について

21×15cm 256頁 定価1,680円（税込）

キンダーブックの

## フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支店・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

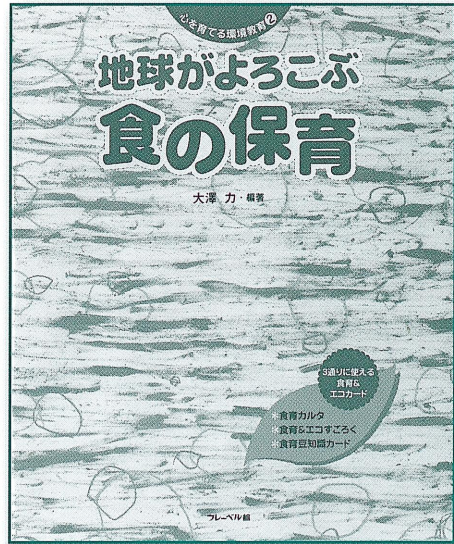
# フレール館の環境教育シリーズ第2弾!

## 心を育てる環境教育②

# 地球がよろこぶ食の保育

大澤 力／編著

子どもがいきいきと輝く「いのちの食育実践」を多数掲載。いのちの源である食べ物にふれる体験を通して、身近な環境から地球環境まで、環境への興味関心を育てます。

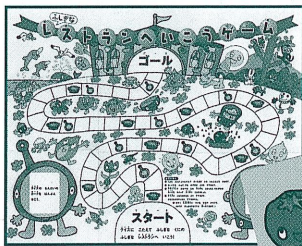


102-12



豊富な事例

26×21cm 112頁  
定価2,625円(税込)



▲すごろく

### ▼食育&エコカード

### ●3通りに使える食育&エコカード付き!

- ・食育カルタ
- ・食育&エコすごろく
- ・食育豆知識カード

### ●主な内容●

地球と自分が1つになること それは食べること! / 世界に広げようエコキッズの輪! / 心を育てる食農体験 / 地球と仲よし! みんなをつなぐ食の保育 / 環境に根ざした食育カリキュラム / 調べてみよう! 参加してみよう! あなたの地域の環境教育 / 持続可能な未来への教育に向けて

キンダーブックの

**フレール館**

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。